

アメリカ黒人とスポーツ

一人種差別の実態とその経済的・社会的背景一

等々力 賢 治

問題の所在

1947年、黒人青年 Jackie Robinson (ジャッキー・ロビンソン) が、アメリカ大リーグのブルックリン・ドジャーズ (Brooklyn Dodgers) 入りを果たした。彼の入りは、白人スポーツ界から黒人を締め出していたいわゆるカラー・バリアー (Color Barrier 色の壁) を突破したという意味で、黒人はもとよりアメリカ・スポーツ界にとっても一つの重要な画期となった。

カラー・バリアーに一ヶ所の穴が開いたことによって、野球、バスケットボール、アメリカン・フットボールの三大プロ・スポーツへ黒人が次第に進出するようになり、今日では、私達がテレビなどを通じて目にするように、多数の黒人の活躍が当然視される状況を生み出すまでに至っている。そうしたことからしても、アメリカ・スポーツ界における人種差別の解消に果たしたその役割は、実に大きかったといえる。

にもかかわらず、もう一方では、そのことによってすべてが解消したのではない、ということについてもここで確認しておくことが必要であろう。水泳やスケート、ゴルフ、テニスなどにおける黒人プレイヤーの皆無に近い状態、また、大リーグにおけるポジション別の白人と黒人の占有率にみられる明らかな違い、などを人種差別の存在を無視して合理的に説明することは不可能である。そ

れは、カラー・バリアーの突破を、人種差別の解消という側面からのみ評価することの非有効性を示している。さらにいえば、それは19世紀末以来黒人ボクサーに付いて廻ったアメリカン・ドリーム (American Dream) の体现者という幻想、そしてスポーツは黒人にとって「社会的上昇への道 (upward escalation)」であるということの虚構性、などを普遍化する一つの契機となり、人種差別の事実を隠蔽する役割すら果たしてきた、と捉えてもよいのではないだろうか。

本小稿では、こうした観点に立って、カラー・バリアーの突破を必然化乃至可能にした背景、その成果と評価、突破以降の差別の実態、などについて述べ、アメリカ・スポーツ界における人種差別の問題を、その寄って立つ社会的・経済的背景との関係の中で明らかにしようとするものである。

1 カラー・バリアー突破以前

まず、1947年以前の黒人スポーツの状況を一瞥しておこう。

黒人は、1863年1月1日の「奴隷解放宣言」によって、その奴隷身分からとりあえず解放された。それまで白人所有者に対して全人格的隷属を強いられ、何らの時間的・経済的自由も所持し得なかった彼らが、スポーツ活動を行ない得る状況になかったことは多言を要すまい。ただし、自らの自

由意志によってではなく、「南部の大農園主の間にはその召使や奴隷の中で屈強な者にボクシングやレスリングを練習させ、これを他の農園主のかかえる同類とたたかわせて、その名拳欲と賭けの興味とを満足させる¹⁾」ために、これを行なった者もいた。アメリカにおける「スポーツは、……略……イギリス志向を基調にして、アメリカ流に受容・再構成²⁾」されてきたのであるが、奴隷によるボクシングやレスリング、そして競馬などは、イギリス流のギャンブル・スポーツがアメリカ流の「見るスポーツ」そして「見せるスポーツ」へ再構成されていく歴史的過渡期に現われた「残虐³⁾」な現象であった。

解放後も、「40エーカーの土地と一頭のラバノ」が切実な要求であった黒人達にとって、スポーツは解放前と同様必ずしも一般的ではなかった。土地や財産などの経済的裏付のない解放は、スポーツを行なうに足る程の余力を彼らに保証し得なかったからである。しかし、1870年代以降の興業化された「見るスポーツ」の発展は、スポーツ界へ進出する新たな機会を彼らに提供した。すなわち、1871年に組織化された野球、そして19世紀最終盤にはプロ化されるアメリカン・フットボールやバスケットボールは、従来からそうであったボクシング同様、彼らとその貧困から脱出するための一つの手段となったのである。

当時各競技にどれ程の黒人が参加していたのか明らかではないが、1880年代中頃には野球、1933年にはアメリカン・フットボールでそれぞれ黒人が追放されたという事実⁴⁾は、その存在を我々に示している。とりわけグローブの改善とルールのスピード化、科学化によって興業的性格を強めたボクシングは、奴隷時代の経験と個人の責仕に負うところが大きいという競技特性によって、黒人達にとって大きな魅力であったことは想像に難くない。恐らく多数の者が、賞金目当にボクサーの道を選んだに違いない。そしてその中でもたぐいまれな実力と強運を兼ね備えたほんの一握りの

ボクサーが、その賞金とともに名声をも手にすることができたのである。彼らの手にした富と名声は、「経済的・社会的階層を自力で昇ることによって自分の運命を切り開く機会を与える⁵⁾」アメリカン・ドリームを体現するものである、とされた。しかしそれもまた、1919年に第9代ヘビー級チャンピオン Jack Dempsey (ジャック・デンプシー) が「ニグロの挑戦者は無視する⁶⁾」という声明を出したことによって、まさしくかなわぬ「夢」となったのであった。

ここにみてきたように、「見るスポーツ」の興業化(=「見せるスポーツ」)は、貧困な生活を余儀なくされた黒人達にとってそこから脱出する機会を与えるものであったにもかかわらず、彼らの進出は次つぎと阻止されていった。野球における「紳士協定」、またゴルフにおけるプロ・ゴルファー連盟の「白人のみ、コーカサス人種のみ」という規約文章など、阻止形態は様ざまであったが、それは、合衆国最高裁判所による1883年の「黒人の市民的自由」を内容とする公民権法(1875年)の否定、同じく最高裁による1896年の「ブレッシー対ファーグソン事件」に関する判決、などによって正当性を付与されていた。とくにルイジアナ州の列車内の黒人隔離に関する後者の判決は、『「隔離はしても平等(separate but equal)」なら差別ではないとする著名な原理をうちたてることによって、あらゆる人種差別に法的支柱をあたえ、これを背後から助長したのであり』⁷⁾だった。

南部諸州を中心とする交通機関、学校、レストラン、娯楽施設など、ありとあらゆる場所と機会における黒人隔離はカラー・バリアーと呼ぶに相応しいものであり、時間的なずれや若干の例外はあるにしてもスポーツ界にも貫徹された。以後、1947年以降まで黒人プレイヤーは、白人プレイヤーと同一の組織や場所などにおいてプレイする機会を失うことになり、黒人のみによる活動を展開することになる。なかならず競技様式の近代化や

プロ化が早く、したがって黒人の参加も早かった野球では、彼らが自らチームを作り、黒人リーグ(Negro League)を結成していった。

1920年に最初のリーグが結成されたのを契機に、多少の紆余曲折を経た後、1937年には黒人ナショナル・リーグ(Negro National League)と黒人アメリカ・リーグ(Negro American League)の二リーグ制を確立した。黒人リーグは、「不況の時代であったにもかかわらず、安定していた⁹⁾」し、史上最高の投手といわれた Satchel Paige (サチュル・ペイジ) や黒人ベーブ・ルースと称された Josh Gibson (ジョシュ・ギブソン) 等をはじめ、後年野球殿堂入りを果たす偉大なプレイヤーも多数擁しており、その力は大リーグにも充分匹敵するものであった⁹⁾。Richard A. Swanson (リチャード・A・スワンソン) は、1939年に行なわれた大リーグと黒人リーグの二つのオール・スター・ゲームを比較し、「黒人オール・スター・ゲームが46,247人の観客を動員したのに対し白人のそれは29,589人であり、その顔色をなからしめた(overshadowed)¹⁰⁾」と述べている。

黒人リーグのこうした技術的・人的蓄積の水準の高さと観客動員力が、次に述べるように実は、カラー・バリエーションの突破を推進する大きな要因となったのである。

2 カラー・バリエーション突破の背景とその本質

「見るスポーツ」の興業化は、1920年代のいわゆる「スポーツの黄金時代」あるいは「大スター

の時代」を通じて驚くべき数の観客を動員し、スポーツ興業資本を確立した。30年代になってもそれは、不況のあおりを受けつつも、基調としては20年代に引き続き幾多の大スター・プレイヤーの名声を利用しつつ、さらに発展してきたのであった。

大リーグもまた著しい発展を遂げ、観客動員数も1939年には935万人、翌40年には1,000万人の大台に乗せるまでになった。ところが第二次世界大戦の勃発が、これに大きな困難をもたらすことになったのである。「ゴムやガソリンの欠乏に基づく輸送難は、チームの行動を一定地域に局限するとともに観客数を減少させ¹¹⁾」、1940年と翌41年の1,000万人台から42年には900万人を割り43年には770万人台にまで落ち込むことになった。また、「プロ野球界は4,000人以上のプレイヤーを軍隊に送った。……略……そして、マイナー・リーグの多くは輸送難と人員不足のために解散した¹²⁾」のであった。

こうした事態が大リーグに大きな打撃を与えたことはいままでもないことであり、興業資本がその立ち直り策を検討せざるを得なくなったことも、当然予想されるところである。一方、この時黒人リーグはその最盛期を形成しつつあったが、それを可能にしたのは、すでに述べたようにその技術的・人的蓄積の水準の高さと観客動員力であった。したがって興業資本がその立ち直り策の一環として、これらを自らの枠内へ取り込み、技術的・人的補充と黒人人口のさらなる観客化を企図したであろうことは想像に難くない。後者の黒人

表1 1910~1930年間の黒人人口の移動

年 代	黒 人 の 人 口			増 加 率	
	1910	1920	1930	1910~20	1920~30
北 部	1,027,674	1,472,309	2,409,219	43.3	63.9
南 部	8,749,427	8,912,231	9,361,577	1.9	5.0
西 部	53,622	78,591	120,347	55.1	53.1
合 計	9,827,763	10,463,131	11,891,143	6.5	13.6

出所：猿谷要『アメリカ黒人解放史』サイマル出版会1971年 p.149

人口の観客化は、興業資本にとってこの時点での対応策であるとともに将来的な可能性の問題として、とりわけ重要な課題であったといえよう。

表1にみられる1910年代から30年代にかけての黒人人口の急激な移動は、第一次大戦のための戦時産業の膨張とその後の急激な工業化を誘因とする北部工業諸都市への集中、と要約してよいであろう。多数の黒人がこれによって労働者化していくのであるが、それは彼らの生活様式の変化をも惹起した。すなわち、「きわめてわずかずつながら黒人の生活は向上するようになり、南部でうけていたよりもすぐれた教育を、多少なりとも余計に享受するようになっていった¹³⁾」のである。生活様式の変化は、大リーグを観戦するための費用と、近代野球の複雑さをも充分理解するに足る能力を彼らに保証しつつあったのであり、興業資本は彼らを需要者として掘り起こし取り込むことを目論んでいた、といてよいであろう。そのためには、黒人をより多く引付けることのできる黒人のプレイヤーが必要であったことはいうまでもない。そして、当時、大リーグにも匹敵する力があった黒人リーグでも最強のカンサス・シティ・モナクス(Kansas City Monarchs)の強打者、Jackie Robinson にその目が向けられたのであった。

彼を大リーグ入りさせたブルックリン・ドジャーズの会長 Branch Rickey (ブランチ・リッキー) が人種差別主義者どころか、人種差別の実態を調査するニュー・ヨーク市委員会のメンバーに任命されるような人物であった¹⁴⁾ことも、Jackie Robinson 自身が技術的に勝れ人格的にも高潔であったことなども、大リーグ入りの極めて重要な要素であったことは彼自身が述べているとおりである¹⁵⁾。にもかかわらず、その本質は、ここに述べたように興業資本による黒人達の需要化にこそあったというべきであろう。

加えて、白人の黒人プレイヤー(すべての黒人であったかどうかは疑しい)に対する態度の変化

も、一つの重要な背景になった。その変化をもたらした者が、陸上競技の Jesse Owens (ジェス・オウエンス) とボクシングの Joe Louis (ジョー・ルイス) の二人であったことは、すでによく知られているところである。二人は1930年代を代表する大スター・プレイヤーであったが、それはなにより彼らが当時次第に勢力を拡大しつつあったナチス・ドイツに、スポーツの舞台において痛打を浴びせたことによっていた。Jesse Owens は、1936年のオリンピック・ベルリン大会で4つの金メダルを取り Hitler (ヒトラー) を悔しがらせ、また Joe Louis は、ナチス・ドイツの誇る Schmeling (シュメルング) を1938年に行なわれた二度目の対戦においてノック・アウトしたことによって、アメリカの威信を守った国民的英雄となったのである。彼らは同時に、「市民権については何も語らなかったので多くの白人によい印象を与え」、「清潔に生活し」、「クリーンなファイトを」し、「そして特に、決して白人の女性と一緒に写真をとらないこと」などの規範を守り、多数派の白人に受け入れられるように工夫した¹⁶⁾。二人の生活の在り方は、たとえ作られたものであったにせよ白人の間に黒人に対する良好なイメージとして固定され、人種差別の解消に力になるとともに、後年の Jackie Robinson を受け入れる土壌ともなったのである。彼らの生活の在り方に対する評価は別にしても、その存在と影響は極めて大きかった。Jackie Robinson によるカラー・バリエーション突破の背後には、こうした要因が複雑に交錯していたのである。

3 upward escalation の虚構性

ブルックリン・ドジャーズ入りした Jackie Robinson は、白人プレイヤーによるヤジや悪質な防害などに加え家族に対する脅迫を受けるなどもしたが、その年の新人王に選ばれ、ワールド・シリーズ進出の原動力ともなった。観客動員の面で

も「新たな動員を可能にし、相当な利益を得た¹⁷⁾」といわれ、興業的にも成功したのであった。

大リーグに相前後して、やはり観客動員数の増加をねらって黒人選手を導入していたプロ・フットボールに加え、1950年にはナショナル・バスケットボール協会も黒人選手を認め、テニスでも全米選手権への出場を許可するなど、他のスポーツもこれに追随した。

しかし、カラー・バリエーションが撤廃されたからといって、黒人プレイヤーが大量に進出したわけではなかった。Jackie Robinsonが大リーグに入ってから10年後の1957年においても「ナ・リーグの黒人選手はわずかに12人にすぎなかったし、1960年になってもア・リーグにおける黒人選手は6人にすぎなかった」のであり、「1967年にナ・リーグで34人、ア・リーグでは21人であった。1977年には黒人の大リーグ選手は284人で、これは両リーグのプレイヤー全体の21%」であった、とJay J. Coakley (ジェイ・J・コークリー) は述べている¹⁸⁾。また、Benjamin G. Rader (ベンジャミン・G・レイダー) によれば、1975年から76年にかけてプロのチーム・スポーツに在籍した黒人プレイヤーの総数は、888人であった¹⁹⁾。表2は、各年の三大スポーツにおける黒人プレイヤーの割合を示したものである。これからすれば、黒人プレイヤーの割合は、1975年の大リーグを除いていずれも例外なく増加してきたのであるが、

表2 黒人プレイヤーの割合 (%)

年	野 球	バスケットボール	アメリカン・フットボール
1954	7.5	4.6	—
1958	12.5	11.8	—
1962	17.0	30.4	16.0
1966	24.0	50.9	25.1
1970	24.5	54.3	33.7
1975	21.0	63.3	42.0

出所: Gerald W. Scully, "Economic Discrimination in Professional Sport," Law and Contemporary Problems 38 (Winter-Spring, 1973), p. 68.

その実数は上記のごとく決して多くはないことを忘れてはなるまい。

また、ここにあげた三大スポーツと陸上競技、そしてその70%が黒人であるボクシングを除いた他のスポーツへの黒人の進出状況は、さらにひどいものであった。Jay J. Coakley は、この5つのスポーツの他に「ゴルフの Charles Sifford (チャールズ・シフォード) と Lea Elder (リー・エルダー)、テニスの Althea Gibson (アルシー・ギブソン) と Arthur Ashe (アーサー・アッシュ)、そしてわずかのスポーツに散らばっている数名の選手の伝記を加えれば、黒人のスポーツへの参加を知ることができる²⁰⁾」とまで述べている。その原因については後に述べたいと思うが、黒人女性フィギュア・スケーターなどまれな例を除けば、今日でもそうした事態に大きな変化はない、といつてよいであろう。

限られたスポーツの限られた定員枠、それが黒人達の目指すスポーツ進出の現実であるにもかかわらず、スポーツは「社会的上昇への道」であるというイデオロギーが多くの黒人、とりわけ黒人少年達を捕えて離さない。たとえそれが、表3に示されているように激烈な「競争」と「選抜」の過程を意味していてもである。表3からは、40万人あるいは60万人という高校生のプレイヤーが、限られたプロの座を目指して上昇していくことの

表3 各段階のプレイヤー数と新人数及び平均在籍年数 (1972年)

	野 球	バスケットボール	アメリカン・フットボール
高 校	400,000	600,000	600,000
大 学	25,000	40,000	17,000
メジャー・リーグ	600	1,222	324
新 人 数	100	157	60
平均在籍年数	7-8	5	5

出所: Adapted from Harold Blity, "The Drive to Win: Careers in Professional Sports," Occupational Outlook Quarterly 17 (Summer, 1973) pp. 3-16.

困難さを充分読み取ることができる。しかも、プロの座をなんとか手にすることのできる新人選手の枠はさらに少なく、幸運にも手にしたとしてもそこに在籍できるのはわずかな年数でしかないことも、それは示している。これらの数字は黒人に限定されたものではないが、さきの黒人プレイヤーの割合や後に述べるように黒人達のプロ志向性が高いことを合わせて考えれば、その「競争」と「選抜」は彼らにとってさらに激烈なものであるとみてよいであろう。

ここにみてきた数字は、すべて黒人達がプロ・スポーツのプレイヤーになることの困難さを表わしている。「社会的上昇への道」を上り詰めることのできる黒人は、途方もない「競争」と「選抜」の過程を勝ち抜くことのできるたぐいまれな実力と強運を兼ね備えたほんの一握りの者に限られている、というのが正確な表現であろう。「社会的上昇への道」は、「一方にごく少数の勝利者を、他方に無数の敗者を生み出す。そして無数の敗者は、人生における決定的な時期と膨大なエネルギーをこの過程で失²¹⁾」うことになる。ここに「社会的上昇への道」が虚構であることは、明瞭である。

4 黒人社会とスポーツ商業資本

黒人達にとって、ミュージシャンやエンターティナーになることと同様プロ・スポーツ界に入ることが成功への道である、といわれていることは一般的によく知られていることである。しかし、すでにみたようにその虚構性もまた明らかであるといってよい。にもかかわらず、なぜ彼らはプロ・スポーツ界を目指すのであろうか。

アメリカン・ドリームの幻想性や「社会的上昇への道」の虚構性を彼らは認識していないのか、あるいは、認識しているにもかかわらずそうせずにはいられないのか、定かではない。確かなことは、黒人スポーツが置かれている状況を彼ら自身

が知り始めたのは、黒人プロ・プレイヤーの誕生がそれほど古いことではないのと同様最近のことであり、その情報も、彼らがマス・メディアを通じて日常的に見聞きする黒人プロ・プレイヤーの活躍に関する報道を上回るものではない、ということである。

黒人をスポーツに向かわせるのは、カラー・バリエーション廃止前と同様、その貧困と、スポーツを貧困からの脱出の手段にするという図式であり、廃止以降、黒人社会を良質なプレイヤーの供給源として位置付けた高度に組織化されたスポーツ商業資本の存在である、と考えてよい。

まず、黒人達の貧困についてみてみよう。1910年代から30年代にかけて、南部から北部へ、農村から都市へという型で黒人人口の流出・移動が大規模に起ったことはすでに述べたが、彼らは多くの場合ニュー・ヨークのハーレム (Harlem) に代表される黒人居住区、ブラック・ゲット (Black Ghetto) を形成した。彼らは労働者化し若干の賃金を手にすることができるようになったという点では奴隷よりましであったが、「雇用は最後、解雇は最初²²⁾」という不安定な立場に常であり、「非白人 (その90%以上は黒人……筆者注) の失業は公式統計でみても、白人のそれの二倍以上と見積られ²³⁾」る状態にある。幸いにして職業についた者でも、その多くは半熟練労働者、家事使用人、サービス業などが多く、その収入は低く安定しない。したがって彼らの所得も低収入に陥らざるをえず、黒人家族の60%が年収4000ドル未満であり (白人は28%) 表4に示されているように平均年収は白人家族の半分程度にすぎないのである。そしてこの貧困に基づく黒人の生活が、「18歳以下の者のうち半数しか両親と共に暮らしていなくて、ここの住居の49パーセントが荒れ果て、25パーセントがつかめこめるだけつかめこまれている²⁴⁾」という、まさに「荒廃」としか喻えようのないハーレムの生活と大差のないものであると考えるとよいであろう。

表4 家族収入の比較 (中位数)

年	白人	非白人	白人にたいする 非白人の割合
	ドル	ドル	%
1950	3,445	1,869	54
1951	3,859	2,032	53
1952	4,114	2,338	57
1953	4,392	2,461	56
1954	4,339	2,410	56
1955	4,605	2,549	55
1956	4,993	2,628	53
1957	5,166	2,764	54
1958	5,300	2,711	51
1959	5,643	2,917	52
1960	5,835	3,233	55

出所：本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店 1964年 p.178

家族の生活がこのように貧困と荒廃の中にあるにもかかわらず、黒人少年の多くは、将来失業に脅かされるか低収入の職業に就くことしかできず、現在の生活を繰り返すことになるであろうことを明確に予感せざるをえない。しかも、彼らが高収入の専門職や知的職業に就くことを阻んでいる低学歴も、スポーツによって大学まで進学し卒業することにより克服できる可能性があるのである。これは決して誇張ではない。彼らの大学卒業率は、1970年で白人の12%に対して5%、1980年でも白人18%に対して8%、という段階に留まっている²⁵⁾。このような状態にあるとき、多くの黒人少年が「ゲッターを抜け出る道、キャデラックやワニ皮の靴、そしてカシミヤ織りのスポーツ・コートを手に入れる道²⁶⁾」としてプロ・スポーツへの道を志向するのは、ある意味で当然のことであるのかも知れない。事実、川口智久の調査研究によれば、カリフォルニア州出身の黒人プレイヤーの71%がロサンゼルス及びその周辺都市から輩出されており、そうした背景との因果関係を強く示唆している²⁷⁾。

他方、スポーツ商業資本は、テレビやラジオ、新聞などを通じて日常的に黒人少年達の心をくすぐり、スポーツへの欲望をかき立てている。たし

かに、スポーツ商業資本の直接的な利潤動機は、種々の大会やイベントによる興業収入あるいは宣伝収入にあるのかも知れないが、それは常にスター・プレイヤーの高度な技術や豪華な生活、そして時にはその容姿すらも動員して子ども達のあこがれや欲望を刺激しているのである。64のテレビ放送局を対象にした1949年のスポーツ調査においてすら、「全放送時間に対し最高35%、最低4%、平均16%の時間がスポーツ放送に充てられている²⁸⁾」ことが明らかになり、1960年代後半には興業的に下降気味であったNBA (National Basketball Association ナショナル・バスケットボール協会) が「オーナーがテレビの可能性、つまり金儲けの道具としての可能性を発見したとたん、NBAは痩せ細るどころか太りはじめ²⁹⁾」たのであった。テレビ放送などによる宣伝収入の増加は、プレイヤー達の契約金や年俸を莫大なものに引き上げてきたが、それが子ども達を魅了しないわけがなかった。ましてや、さきにみたような生活環境にある黒人少年の多くが、スター・プレイヤーの人生に自己の人生を容易に重ね合わせたとしても、何ら不思議なことではないのではなからうか。

1975年のウィンブルドン世界テニス選手権の覇者 Arther Ashe (アーサー・アッシュ) は、「野球は、Jackie Robinson の存在によってすべての黒人少年にとって特別な意味を持っていた³⁰⁾」と述べ、彼もまた Jackie Robinson にあこがれ少年時代野球とテニスに夢中になったことを描いている。結局彼は野球ではなくテニスを選んだが、黒人プレイヤーとして幾多の輝かしい記録を手につることによって「アッシュ自身否応なく多くの黒人少年のあこがれとなり、彼等がその人生を賭して近づこうとする黒人スーパー・スター・プレイヤーの一人になったので³¹⁾」あった。

かつて「大スターの時代」と呼ばれる時期があったように、アメリカ・スポーツ界ではスター・プレイヤーが重要な意味を持ってきた。テレビを

はじめとするスポーツ・マスメディアの大々的な発達、これをさらに実体的かつ普遍的なものにしたのであった。「ロビンソンとアッシュの関係は、決して歴史の皮肉とか、歴史の驚異とかといったたぐいのものではない。プロ・スポーツ界のスターにあこがれた黒人少年が、全てをスポーツに注ぎ込み自分もスター・プレイヤーの座に着く。それは、黒人社会とプロ・スポーツ界の間で絶え間なく繰り返されてきたことである。アッシュもまたそうした無数の連鎖の一構成員であった³²⁾」のであり、こうした仕組が高度に組織化されているのが今日のアメリカ・スポーツ界である。

一人のスター・プレイヤーが、テレビを通じてこれに数千倍する黒人少年を引き付け、その少年達はさきの表3にみられる激烈な「競争」と「選抜」の過程を経てスターの座に着き、また新たに多数の黒人少年を引き付ける役割を果たす。それはまさしく、無限に拡大していくスポーツ商業資本の自己増殖過程を彷彿とさせるものである。貧困と荒廃に喘ぐ黒人社会は、スポーツ商業資本の側からすれば「より優秀なプレイヤーの確実な供給源であり、これを温存することは必要なことでさえある³³⁾」といえるであろう。

5 現存する差別とその意味

数千倍ともいわれる「競争」と「選抜」の過程が存在し、勝者はともかく無数の敗者はなす術もなく元の貧困と荒廃に喘ぐ黒人社会に戻らなければならないにもかかわらず、なぜ黒人は三大スポーツを中心とするごく限られたスポーツに集中するのだろうか。なぜ、ゴルフやテニス、スケートなどではいたとしても僅かであり、水泳やスキーでは皆無なのか。その理由について知り得る資料が充分にはないが、すでに述べてきたアメリカ・スポーツの歴史や在り方などとの関係にも触れながら究明してみたい。

まず、黒人のスポーツ参加に関わる物質的条件

表5 1594都市の主たるスポーツ施設数

プレイグラウンド	14,747
野球場	5,502
テニスコート	13,085
アイススケート場	3,274
陸上競技場	1,933
スタジアム	504
海水浴場	780

出所：山中良正『アメリカスポーツ史』逍遙書院 1967年 p.203より抜粋。

についてである。スポーツを行なうために必要な費用や時間は、その実践主体である黒人の生活を反映しているものであり、いずれも差がない。残る要素は施設・設備についてであるが、アメリカではニュー・ディール政策が公共のスポーツ（レクリエーション）の環境整備に画期的な影響力を及ぼし³⁴⁾、表6のとうり1950年の段階ですでにスポーツ施設が一定程度整備されており、ほとんどすべてのスポーツを行ない得る条件下にあった。したがってその生活環境を背景とする黒人のスポーツ志向と、それを行なうための物質的条件については、いずれも同等であったといえる。

問題の解明は、ここでも恐らく、まずスポーツ商業資本の存在とその欲求にこそ求められるべきであろう。つまり、三大スポーツなどに比べてこれらのスポーツによる利益回収率は低い、ということである。テレビでのスポーツ放映時間についてはすでにみたが、そのほとんどが三大スポーツとボクシングであった³⁵⁾という指摘も同時になされており、そうした傾向はこの間不変であったと考えられる。スポーツ産業資本は、何万人、時には十万人単位で収容できるスタジアムや体育館でゲームを行なうことができ、テレビ放映によってより多くの大衆の目を引き付け多額の宣伝収入が確保できるスポーツに対してのみ、その触手を伸ばしているのである。

次の問題は、未だに黒人に対する差別が厳然として存在している、ということである。「ジョージア州オーガスタで開かれるマスターズトーナメ

ントは、アメリカで最も権威のあるトーナメントだといわれているが、まだそれに招待された黒人は1974年のリー・エルダーひとりだけである³⁶⁾」というような時代錯誤的な体質にあるゴルフ、このゴルフやスキーのように費用のかかるスポーツにはなかなか参加できないような黒人の生活環境を放置してきたこと、などもその現われである。

Samuel Lubell (サミュエル・ルベル) の「人種関係の習慣の変化に対する南部白人の態度」調査によれば、黒人が投票する (95%)、白人と一緒に働く (80%) などでは高い賛意を示したのに対し、同じ水泳プールを使う (9%)、同じレストランで食事をする (39%) などでは賛意は低いものであった³⁷⁾。白人の黒人に対するこうした態度から読み取れるように、白人 (とりわけ南部) の間に公的な部分では黒人との共存を承認しながら、同じプールを使うとか一緒に食事をするといった私的な部分では黒人を忌避する傾向が依然残存していることもある。「いつも白人の子だけが特典を与えられ……略……私たちは火曜日しか市営プールで泳ぐことが許され³⁸⁾」ないというような状況ではないにしても、カラー・バリアー廃止以降も目に見えない形での圧力を感じ、プールから遠ざかりやがてスイマーとして上昇していく道を失う、などという状況も充分予想されるのである。

黒人に対する差別の現存は、三大スポーツからも知ることができる。1976年の大リーグでは、外野手の52%が黒人であったのに対し、ピッチャーとキャッチャーが4%、ショートが0%、サードが17%、セカンドが39%、そしてファーストが50%であり、これは他のシーズンでもほぼ同様であった³⁹⁾。このように特定のポジションに黒人が集中する (させられる) のは「割当制 (Stacking)」のためである。「割当制」は、他の選手に命令や指示を出す重要なポジション (ピッチャー、キャッチャー、ショートなど) から、黒人はそうした能力には欠けるとして排除する機能を果たしてい

る。「割当制」は、野球に限らずアメリカン・フットボールにもあり、黒人プレイヤーは攻撃チームより守備チームに多く、しかも、ラインバックャーやセンター、クォーターバックなどの中心的ポジションは圧倒的に白人が占めているのに対し、黒人はコーナーバックやランニングバックなど非中心的ポジションに集中している⁴⁰⁾。

この他、コーチなどの職業につきにくいとか、テレビ・コマーシャルに出る機会が極端に少ないとか、黒人プレイヤーに対する差別は枚挙にいとまがない⁴¹⁾。

ここにみてきたように、三大スポーツを含めアメリカ・スポーツ界には黒人に対する差別が依然存在しているが、三大スポーツでは黒人プレイヤーを絶対的に必要としており、スポーツ商業資本が必要とし承認する範囲内でそれを排除し得るのである。ところが資本が必要としないものについては、その援助や保護もなく、近代スポーツに付きまわっている「私事性」や「個人責任性」が露出せざるをえず、また差別も表面化し黒人プレイヤーが上昇する機会を減少させる。テニスやゴルフ、水泳などのスポーツに黒人プレイヤーが希少なのは、多少大胆にいえば、アメリカ社会そしてその反映としてのアメリカ・スポーツ界に依然として黒人に対する差別が存在していることの実証であり、スポーツ商業資本がその差別を一定程度排除し解消していく力を有していながら、これを追認し逆に利用していく姿勢をとっていることの実証である、ということになる。

今後の課題

アメリカ・スポーツ界における黒人差別の問題は、ここに縷々述べてきたようにそれ独自に存在するものではない。黒人達が現実生活中を営み、スポーツが寄って立つアメリカ社会その内部に存在するものであることを、まず確認しておきたい。

本小稿では、差別の実態を究明するためにその

社会的・経済的背景を把握するとともに、そこに介在するスポーツ商業資本とその役割に焦点を当ててみた。このことについては、今後もさらに精緻に史実に即して追究する必要がある。また、紙数の制約もあって触れることができなかったが、近年スポーツ界における黒人差別の問題に関わって、その分析・批判並びに種々の見解も出されるようになった。それらについても妥当性、有効性などの観点から比較検討していく必要がある。他日を期したい。

注

- 1) 山中良正 新体育学講座第3巻 アメリカスポーツ史 逍遙書院 1967年 p.31
- 2) 小田切毅一 アメリカスポーツの文化史 不昧堂出版 1983年 p.86
- 3) 当時のボクシングのルールは、ベア・ナックル(素手)で時間制限なし、でありどちらか一方が完全に回復できなくなるまで死闘を展開するという残酷なものであった。奴隷によるそれは“見せ物”という意味で二重に「残酷」なものであったといえよう。
- 4) John A. Lucas & Ronald A. Smith; Saga of American Sport, 1978. 片岡暁夫編訳 現代アメリカスポーツ史 不昧堂出版 1981年 p.136
- 5) 秋田明満「20世紀アメリカ文学にみる夢と現実」関西学院大学アメリカ研究会編 アメリカ 啓文社 1987年 p.232
- 6) John A. Lucas & Ronald A. Smith. 片岡暁夫編訳 前掲書 p.184
- 7) 本田創造 アメリカ黒人の歴史 岩波書店 1964年 p.148
- 8) John A. Lucas & Ronald A. Smith. 片岡暁夫編訳 前掲書 p.137
- 9) この点については、佐山和夫著『史上最高の投手はだれか』(潮出版 1985年)に詳しい。
- 10) Richard A. Swanson; History of Sport and Physical Activity in the United States, WM. C. Brown Company, 1978, p.207.
- 11) 山中良正 前掲書 p.203
- 12) 同前 p.204
- 13) 猿谷要 アメリカ黒人解放史 サイマル出版会 1971年 p.150
- 14) Richard A. Swanson. op. cit., p.208
- 15) Jackie Robinson; I Never Had It Made (宮川毅訳 黒人初の大リーガー ベースボール・マガ

ジン社 1974年)に詳しい。

- 16) John A. Lucas & Ronald A. Smith. 片岡暁夫編訳 前掲書 pp.150-151
- 17) 川口智久「黒人競技者の“押し出し”要因」一橋大学一橋学会編 一橋論叢 第88巻第1号 日本評論社 1982年 p.77
- 18) Jay J. Coakley; Sport in Society, 1978. 影山健他訳 現代のスポーツ その神話と現実 道和健康院 1982年 p.255
- 19) Benjamin G. Rader; American Sports, Englewood Cliffs, 1983, p.334.
- 20) Jay J. Coakley. 影山健他訳 前掲書 pp.255-256
- 21) 拙稿「スポーツに囚われた黒人達」体育科教育 第32巻第1号 大修館書店 1984年 p.63
- 22) 猿谷要 前掲書 p.59
- 23) Hyman Lumer, Poverty: Its Roots and its Future, 1965. 田中勇他訳 アメリカ貧乏物語 青木書店 1966年 p.56
- 24) 本多勝一 アメリカ合州国 朝日新聞社 1970年 p.78
- 25) 明石紀雄 飯野正子 田中真砂子 エスニックアメリカ 有斐閣 1979年 p.210
- 26) Arthur Ashe; Send Your Children to the Libraries, The New York Times, Feb. 6, 1977.
- 27) 川口智久 前掲著 p.71
- 28) 山中良正 前掲書 p.205
- 29) David Halberstam; The Breaks of the Game, 1981. 浅野輔訳 勝負の分かれ目 上 サイマル出版会 1984年 p.245
- 30) Arthur Ashe; Off The Court, The New American Library, 1981, p.37
- 31) 拙稿 前掲著 p.62
- 32) 同前
- 33) 拙稿「スポーツと差別」中村敏雄他編著 体育原理講義 大修館書店 1987年 p.190
- 34) 小田切毅一 前掲書 p.281
- 35) 山中良正 前掲書 p.205
- 36) John A. Lucas & Ronald A. Smith. 片岡暁夫編訳 前掲書 p.171
- 37) Samuel Lubell; White and Black, 1965. 有賀貞訳 白人と黒人 福村出版 1973年 p.152
- 38) Jackie Robinson. 宮川毅訳 前掲書 p.19
- 39) Benjamin G. Rader, op. cit., p.334
- 40) Jay J. Coakley (影山健他訳 前掲書 pp.262-263)に詳しい。
- 41) James A. Michener; Sports in America, 1976 (宮川毅訳 スポーツの危機 上 サイマル出版会 1978年 pp.207-255)を参照のこと。